

①の説明文は村田純一『哲学 はじめの一步 楽しむ』からの出題です。人の持つ感覚について述べた文章です。

問一は1頁上段4行目傍線1「知覚経験」を説明する問題です。1頁上段22行目からの具体例は、1頁下段46行目でまとめられており、ここで「知覚経験」の説明が詳細になされています。よって、この箇所を使用して、記述をまとめます。なお、設問に合わせて、答案の文末は「～側面。」にする必要があります。

問二は1頁上段15行目傍線2「こうした事情」を説明する問題です。1頁上段11行目からの視覚を失った場合の具体例より、知覚の一部あるいはすべてが損なわれるなど、その程度が変わったときには新たな知覚世界で経験を再構築する必要があるということを読みとります。また、「こうした事情」はその後の文脈の中で、知覚世界の在り方が多様である理由とされています。よって、1頁上段11行目からの視覚を失った場合の具体例を一般化しつつ、理由として次の文脈に続けることのできる記述としてまとめてあることが大切です。なお、設問に合わせて、答案の文末は「～事情。」にする必要があります。

問三は1頁下段34行目傍線3「経験」を説明する問題です。傍線3は「これらの」という言葉と繋がっているため、直前の箇所に指示する内容がないか確認します。すると、1頁上段28行目「その経験は、」以降が経験についての説明になっているため、この一文を用いて、制限字数以内に収まるように抜き出します。文末が「経験。」に繋がるように注意して抜き出す必要があります。

問四は1頁下段53行目傍線4「日常生活のなかでも場合によっては、この側面が浮き上がってくる場合がある。」の具体例としてふさわしい内容を選ぶ問題です。「この側面」というのは、「いかに」に関わる感覚・感情的側面を指しています。また、1頁下段63行目から始まる具体例以降を丁寧に読んでいくと、日常生活の中でこの側面が浮き上がってくるとき、私たちは2頁下段101行目「その場に居合わせ包まれているという意識」を持つというように説明されています。よって、これらの内容が含まれている選択肢が正解です。ほかの選択肢は、単に対象に対して感じたことを述べるにとどまり、自分も経験の一部となったということを含んでいません。

問五は2頁上段78行目「ただし、この場合、美しい色を見たり、心地よい鳥の声を聞いたりしている自分が楽しい気分になった、というだけではない。」について、「美しい色を見たり、心地よい鳥の声を聞いたりしている自分が楽しい気分になった、」という具体例では足りないと言われる理由を説明する問題です。「この場合」というのは、2頁上段73行目「対象だけではなく、それを経験している自分自身のあり方もまた経験していることに含まれている」場合を指しています。したがって、「美しい色を見たり、心地よい鳥の声を聞いたりしている自分が楽しい気分になった、」という表現に足りないのは、2頁上段96行目「茜色の醸し出す雰囲気の中に自分も含まれている、あるいは、鳥の鳴き声を作り出す清々しい環境の中に自分も含まれている」という要素ということになります。設問に合わせて、答案の文末は「～

から。」にする必要があります。

問六は空欄[A]から[D]に適切なことばを入れる問題です。[A]にはイ、[B]にはア、[C]にはエ、[D]にはウが入ります。

問七は漢字の書き取りです。楷書で丁寧に書く必要があります。

問八は本文の内容に合致しているものを選ぶ問題です。1 頁下段 46 行目から始まる段落とほぼ同一のことが書かれているウが正解です。アは危機的状況と日常生活とを混同しているので誤り、イは「危機に瀕して日常性が成り立たなくなったときにのみ」、エは「絶えず知覚経験を意識することができる」が本文の内容と食い違うため誤りです。

続きまして②の物語文の解説に移ります。佐川光晴『駒音高く』からの出題です。

プロを志す中学生、引退間際の棋士、将棋会館の清掃員など、将棋に関わる人生が描かれた短編集です。

問一は 4 頁上段 8 行目「絶対に棋士になってやる」について、祐也が棋士になる決意を強くしている理由を説明する問題です。傍線 1 の前の段落に、①兄には勉強で叶わない、②家族もそれをしかたないとみていることが悔しいとあります。そこで、その悔しさを克服するために「絶対に棋士になってやる」と思っているわけです。4 頁上段 14 行目から同 16 行目の段落にあるように「プロの棋士になる以外に国立大学の・・・引け目を感じなくて済む。」の部分を用いて解答を作成してください。

問二は 4 頁上段 17 行目「中学生になってから、祐也は夜中に目を覚ますことが増えた」について、このときの祐也の心情を説明する問題です。中学生になって、夜中に目をさますことが増えたのは、この頃ほとんど勝てなくなっていたことで、プロの棋士になれないのではないかという焦りや不安を覚えていたからです。また、傍線 2 のあとにあるように、将棋だけではなく、勉強をおろそかにしていることを気にしていることも書かれています。「勉強と将棋の両立を宣言した」にもかかわらず、現状では、「プロの棋士になれないのではないかという不安」の二点をまとめることが必要になります。

問三は 5 頁下段 54 行目「虚勢を張る」について、祐也の様子を具体的に説明する問題です。虚勢を張るとは、実力がなかったり、自分の弱い所を隠して、外見だけは威勢のあるふりをすることです。本文中で、これらに該当する箇所としては 4 頁上段 27 行目の「内心で白旗をあげながらも、祐也は両親と兄にむかい、来年こそは奨励会試験に合格してみせると意気込みを語った。」、4 頁下段 40 行目の「2 学期の期末テストで点数がさらに落ちるようなら将棋はやめると、祐也は誓った。」があります。後者は 40 字未満なので該当しません。

問四は 5 頁上段 69 行目「祐也は父に歩みよった。」ときの状況としてふさわしい内容を選ぶ問題です。傍線 4 は、祐也が 4 連敗しそうな状況の中で、思いがけず父に声をかけられた場面です。とても苦しい状

況の中で、父に「苦しかったろう」と優しい言葉をかけられたわけですから、「思わず父の優しさにすがろう」の工が正解になります。アは、「本当は弱音を吐きたいのに言えずに葛藤している」の部分が誤りです。イは父に対して「謝ろう」としているわけではないので誤りです。ウは挽回できないのかと尋ねる父に対して無理だと思うと答えていることから、「何とか期待に応えられるようにしたいと思っている」の部分が誤りです。

問五は「数字」に関連する成句の問題です。一は才、二はア、三は工、四はイ、五はウです。

問六は「祐也は眠りに落ちた。」の理由としてふさわしいものを選ぶ問題です。本文に、父の目からみて祐也は研修会に入ってからあきらかに様子がおかしかったことが描かれています。このことから、研修会員としての生活は強い緊張感を伴っていたことがわかります。そして、対局の後、父に「プロを目指すのは、もうやめにしなさい」と言われ、「身も世もなく泣きじゃくるうちに、ずっと頭をおおっていたモヤが晴れていくのがわかった。」とあります。そして、5 頁下段 123 行目には、「研修会で戦ってきた緊張がとけて、ただただ眠たかった。」とあることから、ウが正解になります。なお、祐也は将棋をやめたいと思っているわけではなく、父も「一生をかけて指していけばいい。」と言っていることから、工は「将棋を指す生活に終止符を打てることにほっとした」の部分が誤りです。アは、「反抗期の祐也にとっては退屈だったから」の部分が本文では描かれていません。イは、父からの助言を受け入れたからこそ、身も世もなく泣きじゃくっているわけですから、「心の中では棋士になる夢を捨てておらず」の部分が誤りです。

問七は作品全体から祐也の将棋への向き合い方の変化を説明する問題です。当初は、絶対に棋士になってやるという気持ちで将棋を指していました。それは、問一で解説したように兄と肩を並べる手段だと思っていたからです。その後、父に将棋を休むように言われた晩に将棋を指した時は、「おれは将棋が好きだ」とうそ偽りのない思いにからだをふるわせています。このことから、前者には「自分の価値を証明する手段」という内容、そして、後者には「将棋そのものが純粋に好き」という内容が盛り込まれていることが必要になります。

問八は本文に合致しているものを選ぶ問題です。アは、本文では、息子の対局に駆けつけたり、昼には電話で話して励ましてくれたりすることがあったと書かれており、息子の夢を応援していることが書かれているので「将棋のプロになることより普通の中学生としての生活をするを願っており」の部分が誤りです。イは、89 行目から90 行目で取り返しのつかないことになるから将棋を休むといいと伝えています。また、107 行目から 115 行目までの箇所が選択肢の「ひとの成長のペースは千差万別なので進路についても世間の評価にとらわれることなく自分らしい選択をすればよい」の部分に該当します。正解はイです。ウは 89 行目で父は「将棋を休むといい」と息子に伝えていることから、「言い出さず」の部分が誤りです。エは、父は、将棋を休むことを提案していますが、やめることを言い渡したわけではないので、この部分が誤りです。